

文 化 第58巻 第1・2 —春・夏—

(平成6年9月) 抜刷

『源氏物語』 年立の動態的解釈の試み

— 正篇の創作過程との関わりから —

呉 羽 長

『源氏物語』年立の動態的解釈の試み

——正篇の創作過程との関りから——

呉 羽 長

一

『源氏物語』の年立とは、後世の研究者が、光源氏及び薫の年齢を基準に、物語の年次の経過を体系的に整理したものであるが、光源氏なり薫なりの生を始めから終わりまで見通した上で各巻・各年次を位置づけるというこうした物語時間の把握には、この二人を含め主要作中人物の年齢記述に関して諸所に齟齬を認めざるをえない。このような年立の様態は、物語年において、年の変わり目で時間の継続相が示されている部分を同じ記号でまとめた場合、その「継続相が示されている部分は、物語の内容上密接にまとまっている部分と重なり合い、そのほかの巻々のグループとは別個の各々の時間を形成している」というあり方に由来するわけだが、しかしその

上で厳密に、「年齢が示されている年の部分は源氏何歳、と決定できるが、そうでない部分は源氏何歳の時、など」という判定は無理」といっても、作者が光源氏なりの生をそれぞれの巻々のグループの別個な時間として分断して積み上げていくことを意図したものではなく、そこには一つの流れとして光源氏の生の時間を編み上げようとする意識があったものと考えられよう。確かに作中人物の年齢には、年立の確かな枠を保証する一貫した等質な時間記述は認め難く、それぞれの執筆の段階で作中人物に対する年次意識の濃淡はあるものの、作者に光源氏の年齢への配慮をもって物語全体の流れと関らせようとする意識があったことは前提としてよいと思われる^②。その認定の上で、物語の進行とそこの年齢記述との間に合理的な解釈がおこなえないものか。そうした解釈のあり方が可能であるとすれば、この物語が作者に書き進めら

れるにつれて主人公の年紀を含めてその世界の内幕を変化させるといふ作品理解の立場においてであらう。

構想の変化も伴って源氏の年紀の枠組みも変化を余儀なくされる。年齢記述の齟齬は、それぞれの執筆の段階の作者の創作意図・意識の異りに由来するものと考えられる。当初併立する形で規模として小さな物語が執筆されておりそれぞれの段階で作者の年次意識としては矛盾のないものであったものが、それらを合わせて一つの流れとして紡ぎ上げる際に矛盾を呈することもあり、あるいはある段階で作者がそこまで描いてきた物語の年紀を整理し新たな構想において物語を押し進めようとした際、その整序以前の創作上の意識のあり方との断層を示して、以前の年齢記述がその整序の枠に入りきれず、矛盾が生じることもある。それら矛盾を抱懷しつつ現行の形に落ち着いた年齢記述の総和を一つの時間軸に体系化しようとしたものが従来の『源氏物語』の年立であったわけだが、それを作者の意識の進展に呼応する物語の時間として見直すとき、それはいわば構想の変化を含む作者の物語に対する姿勢の変化をそのまま全体として取り込んでいるものと考えられる。つまり、年立を、作者のそれぞれの執筆段階の可変的な年紀意識の現れの総体において捉えようとするのである。特に光源氏をめぐる物

語では、こうした観点による年立の解釈が有効であるといえる。そこには物語の創作の内的ダイナミズムを浮き彫りにするものが内包されていると思われる。このようにして浮かび上がる物語の時間は、物語世界の一つの読みの可能性の開示であるとともに、従来の年立把握の上に立った内在的な時間と隔たりを有することにより、そうした物語の時間の解釈を相対化するものを胚胎しているといえるのではないか。以下、本稿では、光源氏（以下源氏と略称する）をめぐる年立を物語の創作の経緯という観点から捉え直す中で年齢記述の齟齬の由来を考察し、従来一つの時間の流れの体系において主に読者の側から捉えられていたこの年立の解釈に新しい視角を提示したいと思う。

二

「藤裏葉」巻には源氏の年齢に関して、「あけむ年、四十になり給へれば、御賀のこと、おほやけよりはじめてまつりて、大きなる、世のいそぎなり。」（二〇一ページ³）という記述がある。これ以前の源氏の年紀に関する記述は「桐壺」巻以外にはみられず、このときはじめて源氏は三十九歳であることが示される。ここから逆

算して源氏の年紀が確定されることになるが、その確定の際まず考えねばならないのが「梅枝」「藤裏葉」両巻の直前に位置する玉鬘十帖の源氏の年齢であらう。玉鬘十帖は従来⁽³⁾の年立によると、

・「玉鬘」巻が三十五歳

・「初音」～「真木柱」巻が三十六～三十八歳

とされているが、この巻々については、直前の「乙女」巻及び後の「梅枝」「藤裏葉」巻との接続の不自然さや登場人物の違いなどにより、「藤裏葉」巻が書かれて後に補入されたとする成立に関する考説があることに注目したい。その所論のうち、玉鬘系十六帖の一括挿入や両系の内容把握のあり方、玉鬘系の挿入の理由などについては批判があり修正の必要などであるが、帚木三帖及び「末摘花」巻、あるいは「蓬生」「関屋」の巻々や玉鬘十帖が、本系とされる巻々と時間を異にして描かれ添えられたという観点は、支持してしかるべきものと考えられる。その論点を踏まえて玉鬘十帖を迎えることで、この十帖を書く前、作者には別の年紀の構図があり、その構図によって作られた当初の構想が執筆につれて変更し、現行の形態として帰結したのではないかという見解が導かれる。

玉鬘十帖は、「初音」巻から「行幸」巻までの巻序と

その始発の遊戲的内容から、当初は源氏が造り上げた六条院の四季を一年かけてめぐる枠組みをもっていたとみられる。⁽³⁾つまり「玉鬘」巻でその設定がおこなわれ、「乙女」巻の内容を受けながら「初音」巻以下、春夏秋冬の風趣を背景に玉鬘をめぐる若い人々との恋を操作する源氏の姿が描かれようとするわけである。そうした源氏の玉鬘との仲らいを一年で切り上げ彼女の最終的処遇の形を導き「梅枝」「藤裏葉」巻に繋げるものであったことが推測される。しかるに、本来恋愛模様の操作者の位置にあるはずの源氏は、その位置にいたたまれず「胡蝶」巻で玉鬘へ恋心をうちあけて以降、恋の当事者として彼女と関ることに深入りしてしまう。更に「野分」巻以後そこまで書かれた源氏の玉鬘との恋とそこに導かれていた内大臣の慮りを含めた物語の状況の收拾に苦慮して、ついに玉鬘をめぐる事件の帰趨を描く「真木柱」巻が終わるまでに計三年を要してしまうのである。⁽⁶⁾

「野分」巻までの時間の刻みと「行幸」以下三帖のそれとの違いからも構想の変化が認められ⁽⁷⁾こうした創作の経緯が導かれるところだが、それらを勘案すれば、当初六条院の四季のめぐりは、源氏三十九歳の前年、つまり当初三十八歳の⁽⁸⁾こととして目論まれており、源氏三十八歳の「初音」以下の巻々で彼の玉鬘を中心とする若き人

々の恋の操作の時間を一年間でまとまりをつけた上で「梅枝」「藤裏葉」両巻に繋げる意図があり、更にその前年の玉鬘の発見と六条院へのひきとりを描く「玉鬘」巻で源氏は三十七歳であったと考えられる。それが、右のような変更により、前述のような従来の年立の形、「玉鬘」巻は三五歳のことに繰り上げられて、「初音」以下の巻々が三十六歳から始まり、三十八歳において玉鬘をめぐる物語が終わる、というあり方になったのではないか。

なお、もとは「乙女」巻と「梅枝」巻の間に一年の出来事を描く一巻が存在し現在の形に膨らまされたとする考説として、風巻景次郎氏「源氏物語の成立に関する試論」⁽⁸⁾がある。風巻氏は「初音」から「真木柱」巻に相当する内容を一年間のこととして描いた「桜人」巻の存在を想定し、その主題を敷衍・発展させて玉鬘十帖という一系の物語が成立したとされるが、氏の所論の場合、「桜人」巻を設定する必然性について紫上系と玉鬘系の区別から批判がみられるところである。⁽⁹⁾この点を踏まえて高橋和夫氏がこの若菜系に属する一巻の原形を求めてその内容を推定され、一方で武田宗俊氏はこれを、玉鬘巻をその並びとするX巻として想定し、そのX巻があとを残さず消えて「初音」以下九帖に吸収されたとされて

いる。⁽¹¹⁾これらの所説を通して、紫上系の一帖の代りに、改めて「乙女」巻の時間と並行する「玉鬘」巻以下十帖、もしくは「初音」以下の巻々の内容に差し替えたとする考えの有効性が認められるところである。⁽¹²⁾他方当初「乙女」巻と「梅枝」巻の間に、「胡蝶」巻にあるような紫上の秋好への春の歌の返しや夕霧・雲井雁の結婚問題の押し進めなどの題材をもって書かれるべき一年の空白をすえ置いて、「梅枝」「藤裏葉」二帖の執筆のあと、そうした題材を、玉鬘をめぐる物語の中で描こうとした作者の構想が、執筆に従って三年間の叙述に変更したものと考えることができるのではないか。玉鬘十帖が改作により成立したのか空白を埋めようとして現行の形になったものかは確証を認めたいところであるが、X巻を想定する場合、「玉鬘」巻でそのX巻の並びとして詠えられた内容が完結することになり、それでは源氏と玉鬘の交渉が濃密なものをもたないまま終わることになると思われ、物語の中で違和感を感ぜざるをえない。「桜人」巻を想定する改作説は、「若菜」上下巻・「柏木」巻が書かれた後の段階に書き入れられたとすることから、「若菜」以降の長編的物語の方法的成熟がこの玉鬘十帖を経過することで導かれたものであるという観点と一線を画するもので、私見では後者の立場によることで空白を想

定する考えに従っておきたい。

右のように玉鬘十帖の成立の経緯を考えると、源氏三十七歳の「玉鬘」巻で、紫上が右近に、「女君、廿七、八にはなり給ひぬらむかし、さかりに清らに、ねびまきり給へり。」(三五六ページ)と、その美しい容姿から年齢を推測されていることからして、この「初音」以下の巻々を書くとする時点での源氏との年齢差は九〜十歳であることになるが、この紫上の年齢は、これも風巻氏の指摘されることだが、「若菜」下巻、源氏四十七歳のとき、六条院の女樂の後の源氏と紫上との語り合ひの際、「ことしは、三十七にぞなり給ふ」(三五七ページ)とある年齢差と符合し、厄年の指摘により彼女の重患が導かれることが了解される。ちなみに「玉鬘」巻において右近の推定で二十七とあったのは、源氏と十歳差の二十七がふさわしいとわかるが、右近の推定として臆ろにしたものであろう。こうして、当初の年紀は、源氏・紫上の年齢差を十年とした上での記述だったものが、「初音」巻以下の展開が膨らみ、「真木柱」巻を書き終えた時点で年紀が変更されることになり、しかし従来の作者の内部で紫上・源氏の十歳という年齢差が潜在的に作用して、ここで紫上を三十七としてしまったと考えられるのである。

「玉鬘」巻の当初の源氏の年齢がこのようであるとすると、「乙女」巻以前の源氏の年齢もそれぞれの巻の執筆時点では二歳年長であったものとして考えられる。「乙女」巻第三年と「玉鬘」巻の繋がりについて、後者が前者と同年のこととするか翌年のこととするかで新『玉の小櫛』・旧『花鳥余情』の年立の解釈が分かれるところであるが、新年立では、唯一「玉鬘」巻第二年の九月に「北の町にもものする人の並には、などか見ざらまし。」(三六三ページ)と源氏の言にあることが、「乙女」第三年十月の明石君の六条院入り(三二五ページ)と時間的に逆になること以外には矛盾がなく、この矛盾は、大朝雄二氏が、六条院への移りの多忙の最中、右近の初瀬詣ではふさわしくないと指摘されることとともに、既に書き終えていた「乙女」巻から「玉鬘」巻を後記するまで時間の隔たりによるもので、「玉鬘」巻のこの記事を書く段階でその物語時点後にあるはずの「乙女」巻の移りは既に済んだことと見なしてしまった、作者のケアレス・ミスと考えたい。その場合、「明石」巻の第二年及び「濡標」巻第一年の源氏の都への回帰が三十歳となり、二十歳代の物語・三十歳代の物語の間に須磨の流離が位置することになる。「若紫」巻での紫上垣間見や冷泉誕生を導く藤壺への侵入が源氏二十歳であることを含

う。

三

め、その生涯を決定する節目の歳が二十、三十（京への召還）、四十（「若菜」上巻以降における新たな物語の展開）となる。このことから、この段階で十年ごとの構想が存在していたことが考えられる。¹⁵十年を単位とする構想という点の指摘については、藤村潔氏による十年単位説、つまり基本的には、十年を単位とする構想に従って各々の十年にいくつかの巻を詰め合わせその十年が独自の恋愛の趣向によって繰り広げられるとする考説がある。¹⁶

この藤村氏の所説で、十年の枠の中に物語が詰め合わせられるというあり方については、源氏の人生の上で十年という節目を基本的に念頭にしつつ物語の構想の変動に対応して書き重ねられていくという、物語の創作においてダイナミズムをみる立場から従えないところがある。

また後述のように、源氏四十代・五十代の年紀についても、そこでの構想を動態的に把握する立場から、別の年次把握に拠らざるをえない。¹⁷十年の枠は当初から確かな枠として存在していたものでなく、構想の展開に従って現れ、その枠に沿いながらも物語世界が進展するにつれて変化したものと考えたい。そうした把握の上で十年ごとの構想の重ねを考えると、玉鬘十帖執筆以前には源氏が二年年長として描かれていたという見解がより確かなものとして認められることになる

玉鬘十帖執筆以前の段階には右に修正されたような年紀で物語が構想されており、そこでは物語の時間全体が源氏の二年年長としてみることになるが、源氏の流謫以前には、その二年年長を前提にしつつ、更に複雑な事情を想定しなければならない。

まず、源氏の流謫から帰京までの年紀について考えると、「落標」巻二年目に冷泉の皇子即位のことが記され、その年齢が十一歳とある。

明くる年の二月に、春宮の御元服の事あり。十一になり給へど、程より大きに、おとなしう、清らにて、たゞ、源氏の大納言の御顔、二つにうつしたらんやうに、見え給ふ。（中略）うちにも、「めでたし」と、見たてまつり給ひて、世の中ゆづりきこえ給ふべきことなど、なつかしう、きこえ知らせ給ふ。（一

〇三ページ）

冷泉はまだ幼い皇子であったが源氏の帰京以降の栄光を導くためにはこの人物を帝として即位させなければならない。選ばれたのが十一歳であった。それでも幼さは

否めないが、年齢に比べて賢く「ねび」た存在として描いてその幼さを補っている。¹⁸⁾このときの源氏は、前節の考察から二歳年長として修正したところで三十一となっているが、そうすると冷泉とは二十年の差があることになる。

冷泉の誕生からその即位までが十年とされたことは、これによってこの冷泉が「紅葉賀」巻で藤壺と源氏の間の子として誕生した時点から十年という年月の流れが初めて確定したことである。それは、それ以前には流謫以前の源氏の年齢を概ね二十代のこととして緩い意識で書かれていたものが、「紅葉賀」巻二十一「落標」巻三十一という形で二十代の枠として確定し、流謫以後を三十代のこととして構想することでもあった。緩い意識で書かれていたことは、紫上の年齢についても同様であろう。「玉鬘」巻で彼女の年齢が右近により「二十七八」と推定される記述（前述）と照応させることで、「若紫」巻、北山の垣間見で源氏に「十ばかりにやあらむ」（一八四ページ）とみえた紫上は十歳、「紅葉賀」巻で彼女が少納言に「十にあまりぬる人は、雖あそびは忌み侍る物を。」（二七九ページ）とその幼さをたしなめられた時点では十一歳と確定される。これらの点では矛盾はみられないが、「若紫」巻で源氏が北山僧都とはじめて対面

した折、紫上の母君についての僧都の説明で、「女、たゞ一人侍りし、失せて、この十余年にや、なり侍りぬらん。」（一八九ページ）とあることは、右の確定された年次と矛盾する。つまり母君が亡くなって「十余年」とは、仮に最低の年数として十一年としてもここで紫上の年齢はそれ以上になり、前に十歳としたことと相容れない。この矛盾は、直接には「落標」巻で「紅葉賀」巻との隔たりを十年とした上で、「玉鬘」巻で紫上の年齢を「二十七八」としたことに由来するが、その淵源は「若菜」巻の時点の紫上の年齢表記が源氏と十歳の差を考慮した上で十歳程度とする緩い感覚で捉えられていたことに求められるのではないか。

このようなあり方に対して「落標」巻の段階では、それまでの年齢の重ねについて再把握がおこなわれる。

「落標」巻からさかのぼって「紅葉賀」巻までを十年とすると、従来の記述では一年の空白が必要になる。その一年を「花宴」巻のあと「葵」巻の前に置き、源氏が大將に就任した一年をあてることになったのであろう。これに関して、「若菜」上巻で朱雀院が源氏の人柄を賞賛してこの時期の彼について、「廿がうちには、納言にもならずなりにきかし。ひとつあまりてや、宰相にて大將かけ給へりけむ。」（二一八ページ）と回想している。

これは、「若菜」上巻執筆の時点で、作者が「葵」巻の前に空白の一年の存在を認めており、そこに大将就任のあったこととして示すものである。この空白の一年は、「濡標」巻での年次の整序の段階では二十三であったものが、「若菜」上巻では前述「初音」以下九帖の筋の膨らみのために二年下下げられて二十一歳に変更したものと考えられる。

右のような「濡標」巻において以前の年紀が多少変更・修正されたことが認められるのだが、それにしてもその変更は、源氏の帰京までの物語の時間が彼の二十代のものとしてはば粹付けられ、整えられていた内容であったことを前提にしたものであることは首肯してよからう。

その前提の上で、しかし一方で年立上明瞭な矛盾がみられることは注目しなければならない。例えば「賢木」巻、六条御息所をめぐる、「十六」にて、故宮に参り給ひて、廿にておくれたてまつり給ふ。卅にてぞ、今日また、九重を見給ひける。」(三七四ページ)という記述について考えると、この時源氏は二十五歳(新年立の場合十三)であり、十年前の源氏十五のときに故宮との死別、春宮の交替を示し、一方「桐壺」巻で源氏四歳のとき朱雀の立太子の記述と重ね合わせると、源氏四〜十五歳に

は二人の春宮が存在したことになる。

また「若紫」巻で源氏は、玉鬘十帖執筆以前の年立によると二十歳であり、「明石」巻では二十九歳と、その間九年の差があるのだが、「若紫」巻で良清の明石入道娘に関する噂(一八〇〜一八二ページ)によると代々の国守がこの娘に「心ばえ」を見せて拒まれていることから既に結婚の適齢期にあることが読み取れ、そこでの話の内容が「明石」巻の明石君をめぐる入道の打ち明け話(「住吉の神を頼みはじめたてまつりて、此(の)十八年になり侍りぬ。めのわらはの、いときなう侍りしより、おもふこゝろ侍りて、年毎の春秋ごとに、かならず、かの御社に参る事なむ侍る。」七四ページ)で明石君十八歳であることと近接していることと考え合わせて、二つの時点は作者の意識としてはもっと隔たりの少ないものであった可能性がある。

「桐壺」巻と「賢木」巻の記述のつき合わせによる春宮併立の矛盾は、「桐壺」巻が源氏の将来を見越した意識においてその年紀を整然とさせる意図で描かれたものと考えられ、それと齟齬する「賢木」巻の御息所の年齢記述は、この箇所が「桐壺」巻にみられるような年紀が整えられる以前に叙述がなされていたことから生じたことみなしてよいのではないか。「賢木」巻の年齢記述は、

典拠となった『白氏文集』『白髮上陽人』の「玄宗末初歳入、入時十六今六十」の詩文を生かすためのもので物語の時間との関りを示す年齢を従としたことの指摘²⁰⁾がなされているが、それにしてもこのような単なる修辭上の理由で年立への配慮を欠くことになったとするには疑問が大きく、ここでは創作上の前後関係から解釈をおこなうのが妥当と考える。御息所十六歳の記述が「桐壺」巻より先に書かれたものとする、二十代の物語が現行の形で年数を整理されてまとめられる以前にそれには拘束されない挿話のあったことが予想される。

つまり、物語の原初的段階の挿話（源氏と藤壺の恋をめぐる物語や六条御息所の物語など）がそれぞれ独立してつくられており、これらを一つの物語として組み合わせ、更に整理・増補していった「桐壺」「若紫」「紅葉賀」「賢木」「須磨」などの巻々にみられる長編的流れが成立しその段階で年紀上の矛盾を生じた²¹⁾と考えるものである。「賢木」巻の六条御息所をめぐる年齢記述は、「桐壺」巻で示される長編的構想以前のものと考えるのである。

このように須磨・明石流離以前の複雑性は、物語が互いに異質な挿話によって組み合わせられていることに起因するものではないか。話の核になる挿話に何段階にわたって新たな挿話が増補されていて、その最後の段階で挿

入されたものは流謫までの段階で挿入もしくは組み直しがなされたものであった。須磨流離をめぐる長編的構想についても「若紫」「紅葉賀」巻と「花宴」巻以降ではその間に断層が認められ、制作の多層性が読みとれる。

「若紫」巻で暗示される明石君の年齢と「明石」巻の彼女の年齢の近接を示す記述については、前に当初年数の隔たりがより少ないものであった可能性を指摘したが、この両巻の間に様々な挿話が入り込み、九年の歳月になったと思われる。紫上についても、「若紫」巻のこの時点で「十ばかり」とあったわけだが、母君について「失せて、十余年」とあることは紫上の十二歳以上を予想させ、当初はこれより年長であることが考えられ、この点からもやはり須磨流謫までは現行に比べ短い期間として構想していたことが窺われる。その場合、当初の「明石」巻あたりで紫上はもっと年少であったことが想定されるところである。

「若紫」「明石」両巻の間に新たな挿話が増補されたことについては、例えば「賢木」巻第三年の三位中将との韻塞ぎの負業や朧月夜とのこの巻二度目の逢瀬も、直前の挿話との異質な接続から、初めはなかったものである²²⁾。更にそうした類の箇所の一つとして、池田勉氏の指摘される「紅葉賀」巻末の異質な箇所もあげられよ

う。これらの内容は概して源氏の情趣的面を豊かに描くものだが、これらの増補により年次が二十代の長編物語の枠を支えるものに変更することがあったのではないか。

こうして流謫以前の源氏の年紀が二十代として整えられることになるが、この段階の物語「桐壺」「若紫」「紅葉賀」「賢木」「須磨」の巻々に、「まだ、中将などにもものし給ひし時は、」「(帚木)巻五五ページ」という限定によって帚木三帖・「末摘花」巻が源氏の若き日の恋として添えられる。「若紫」巻「紅葉賀」巻の時間と抵触しない形で「若紫」巻の前後に置かれていることから、前述のように「初音」以下の巻々が一年間のこととして構想されたものであったとすれば、帚木三帖が十九歳と解釈できるが、基本的には大將就任以前の源氏をめぐる別伝として、「玉鬘」巻が「乙女」巻第三年と並行するあり方と同様に、「若紫」巻・「紅葉賀」巻と並行する時間意識で書かれたものとみてよいのではないか。

四

以上、「若紫」以後「濡標」巻以前が執筆に従って変更した経緯を述べたが、更に「濡標」巻第二年の冷泉「十

一」歳の確定は、作者がこの「濡標」巻以降を源氏の三十代として描こうとしていたことを示すものである。

それは、源氏の政治的繁栄への道筋を描く十年であった。それが「藤裏葉」巻、三十九歳で達成されるとき、帚木三帖及び「末摘花」巻で源氏が出会った三人の中の品の女性との後日譚を、「蓬生」「関屋」の両巻、及び玉鬘十帖で描くことになる。つまり、「蓬生」巻で、「濡標」「絵合」「松風」「薄雲」の巻々において流れる時間と抵触しないように並行する時間を、後見のない古風な末摘花の逆境において生動させたが、しかし彼女の生に自己を内在化し自己の抱懷するモチーフ——俗物性の立入りを拒む美しい魂の造型・後見を失った女の逆境下の生の追求——を彼女において押し進めすぎて、右に述べた「濡標」巻以下の本系の時間に立ち戻るための收拾に苦慮することになる。「関屋」巻で空蟬との再会を描いて「帚木」「空蟬」巻以来の二人の関係を一応の結末に導いた後、更に「乙女」巻と「梅枝」巻の間に玉鬘をめぐる一年を与えられたが、「蓬生」「関屋」二帖の場合とは異なり、今度はそれを收拾できず、前述のような事情により「初音」巻以下の三年を要する形で変更せざるをえなくなったのである。

大朝雄二氏は、「梅枝」巻に「対の上」(一六四ページ)

と「呼び直されている」ことから、この段階で「若菜」巻以下の、紫上を超える身分の女性が正室として登場する構想が成立しており、ここから玉鬘十帖が溯って書かれることは物語の展開上ありえないとされる。しかし「対の上」の語は「朝顔」巻などにもみられ、二条院もしくは六条院における紫上の居所を明示して源氏との位置関係を表すときにこの語が使用されることがあり、「梅枝」巻の「対の上」の場合は、同巻の同じ薫物合わせの挿話中の、「うへは、ひむがしの対のなかの放出に、御しつらひ、殊にふかくしなさせ給ひて、」(一六〇ページ)という記述をうけて使用されたものと考えられる。この点からこの巻の「対の上」の用例をもって玉鬘十帖の「梅枝」巻以前の執筆ということ否定することはできない。

なお、「乙女」「梅枝」両巻の間の期間が当初一年として予定されていたものとする、「梅枝」「藤裏葉」両巻においては春宮十一歳、明石姫九歳となる。明石姫は九歳で裳着、入内として描かれていたことになる。

これは『源氏物語』執筆とはほぼ同時代の藤原定子十四歳(正暦元年)、同彰子十二歳入内(長保元年)の例や、物語中の内大臣(もとの頭中将)の娘弘徽殿女御の十二歳入内に比べて格段に若い。作者はこの点の顧慮がなかったものとも思われるが、こうした配慮を欠いて「藤裏

葉」巻で明石姫の入内を描いてしまったのは、源氏三十九歳のうちにその政治的な繁栄の基礎を描き上げてしまおうとする意識が先行したためとも考えられる。そしてそのような大団円的な総括を「藤裏葉」巻までの中でおこなうことには、翌年の四十賀に続いての円満な形で物語の終焉が目論まれていたことも推定できよう。しかし「乙女」巻・「梅枝」巻間に一年の空白として据え置いた事蹟を描こうとして玉鬘との交渉を巡るとき、その内容が肥大化してしまい、そこで触発された新たな物語を展開することになったのではないか。「初音」以下九帖で三年を要するようになったことは、結果的に明石姫・春宮をそれぞれ二歳年長とすることになり、年齢的にはより自然なあり方で物語が展開することに落ち着いたわけである。

五

作者による源氏の年紀の措置とそれが執筆に従って偏向するところに現れる物語の時間記述の齟齬は、「若菜」上巻以降においても認められる。

「若菜」上巻に先立つ「藤裏葉」巻の源氏三十九歳の

繁栄の姿は、当初（例えば三十代の構想の成立の時点など）の段階で四十歳の円満なその生の完結による物語の終焉が見込まれていた可能性を指摘したが、しかし作者はそれをせず、玉鬘十帖の執筆に従って新たなモチーフを得て、十年単位の書き綴りの遵守の上で、彼の生涯を十年延長させた。そこで源氏の罪の応報を描き、その後で円満な出家を導こうとしたものと思われる。

「若菜」下巻、女三宮降嫁に関する出来事や明石一族の住吉詣を描いた後に四年の空白をおくこともその計算によるのではないか。その空白は、源氏五十歳の出家・物語からの退場の目論見において源氏に藤壺との罪の応報を経由させるために四十七歳をもって再開されるまでに及ぶ。その空白では、源氏の老いの深化を明らかにし、紫上の苦悩の日々の重なりを暗黙裡に示して彼女の位置の相対的な変動がもたらされるものであったが、ともあれ右の年次の構想により、

「柏木」巻四十八歳、

「横笛」巻四十九歳、

「鈴虫」巻四十九歳

としてその晩年の時間が進行する。「鈴虫」巻は従来の新旧年立では五十歳とされているが、藤原定家『奥入』以下の説をふまえての根拠により四十九歳と考えるのが

妥当といえる。それにしても「鈴虫」巻が源氏四十九歳か五十歳かの判断に揺れがあるのは、作者の意識として年立へのこだわりが小さくなっているという事情があるものか。⁽³⁴⁾ 右により「鈴虫」巻源氏四十九歳とすると、この巻で女三宮・冷泉との最後の関りを描いて俗世のほだしを消去して、この後彼の五十歳での出家をおこなわせる構想が認められる。そこでは紫上に源氏を看取らせることが意図されていたであろう。⁽³⁵⁾ しかしこのあと源氏が、

「のこりの人々の、物はかなからむ、たゞよはし給ふな」と、さき／＼も聞えつけし、心たがへず、おぼしとどめて物せさせ給へ（八七／＼八八ページ）

と、紫上の後見を依頼した相手の秋好中宮は、右の源氏の申し出に対して、

亡き人の、御ありさまの、つみかろからぬさまに、ほの聞くことの侍りしを。さるしるしあらはならでも、おしはかりつべき事に侍りけれど、おくれし程のあはればかりを忘れぬことにて、物のあなた思うたまへやらざりけるが、ものはかなさを。「いかで、よう、いひ聞かせん人の、すゝめをも聞き侍りて、身づからだに、かの焰をも、さまし侍りにしがな」と、やう／＼つもるになむ、思ひ知らるゝこともあ

りける（八九ページ）

と紫上の保護を承引しようとしな。秋好は生前の妄執によつて苦患の中にある母六条御息所の菩提を弔うため自らの出家を望むのである。一旦はその意志を留める源氏であつたが、紫上はこれにより源氏の死後秋好による後見が保証されなくなる。この時期、一方で「横笛」巻以来夕霧の紫上への「犯し」の脅威が顕著になっている。彼は源氏の拘束の内から逃れ落葉宮への恋愛に深入りしているのである。そこで、源氏五十歳にあたる「御法」巻一帖を使い、紫上を先に物語の舞台から退場させることになる。そのような変更には、作者の紫上への共感が源氏に凌駕するほどになっていたことが大きく作用したと想定される。

この結果、後の増補という指摘もありなお考察の余地がある「夕霧」巻をはさんで、「幻」巻は、源氏五十一歳のことになる。ほだしを消す意図で紫上の死を先に描こうとした作者であつたが、紫上を失つた源氏の悲しみ・迷いにより後世への清浄な心を彼の中に導くことにならず、源氏五十歳の円満な物語舞台からの退場（出家・死）の目算は水泡に帰するのである。こうした源氏の年紀に対する作者の意識の変更が創作の経緯を勘案する中で読み取れるのである。

六

以上、物語の創作の経緯という観点から年立の解釈をおこなつた。その要点を次に掲げる。

①玉鬘十帖の執筆の経緯を読み解くことで十年単位 of 構想の重なりが執筆の目安として存在したことが認められる。

②「落標」巻の冷泉十一歳には、それ以前を源氏二十代の物語として確定し、更に三十代の物語を進展させようとする作者の構想が窺える。

③須磨流謫以前の物語は創作の次元の違う挿話が組み合わされて源氏の二十代の時間を作りだしており、そこでの挿話の組み合わせの不整合が源氏の年紀上の矛盾として現れたものである。

④源氏の物語は五十歳で閉じられる予定だったが、「鈴虫」巻において顕在化した新たな物語の状況により、変更を余儀なくされた。

これらの結論を通して、当初小さな独立した話の集まりであつた『源氏物語』が、挿話の重ねの中で二十歳代の時間を整え、更に三十歳代・四十歳代と、それぞれに指定された時間が固有な自律性により変更を与えられつ

つ独自の物語世界を紡ぎ上げていった事情を想到することが出来る。つまり、『源氏物語』は当初源氏の主要な女性たちとの交渉や、流離とその克服をめぐる小さな独立した話の集合であった。そうした話を二十歳代のこととして長編的構想において繋げて、新たに挿話を加えて整える幾層かの段階があり、更に源氏の須磨・明石流離の後、冷泉帝十一歳即位を契機に、先の二十代の年紀がより厳密に秩序化されることになり、その上で三十代の物語として帰京後の栄達の構想が紡ぎ上げられる。十年単位の構想とは、このように当初はさほど厳密性のないものであったものが、長編構想の押し進めに従って「潯標」巻でより確かなものになるというように可変性をもつものであったと思われる。物語は一旦は源氏の準太上天皇に至るまでを描くが、なお帚木三帖・「末摘花」巻に対応して「蓬生」「関屋」両巻の執筆の後、夕顔の後日譚として玉鬘十帖を挿入するとき、前に述べたように、当初一年の構図を三年間のこととしてしまい、以前の各帖の記述を二年若返らせ、三十代の物語の枠の変更が余儀ないものとなる。

更に「若菜」以降その生の終焉まで四十代のこととして描く予定であったものが、女三宮・柏木事件の後、紫上の処置に苦慮して、最後になって変更し、年立の混乱

をひきおこしてしまった。源氏五十歳に収まらぬ「幻」巻は、物語の内なる秩序に促されて当初の設定から離れた作者の苦慮の形を反映している。

このように、その記述の齟齬を含めた年立のありようは、物語創作の進展に関する作者の姿を象るものであったといえる。

以降の「匂宮」以下の巻々の場合、薫についてそれぞれの期に区切ってその事蹟を描こうとするような年齢の枠についての意識が薄く、源氏において迎えることのできたような年紀に含まれた意味と同様な意味をそこに見出してその物語時間の把握をおこなうことはできないといえるが、そうした年紀のあり方は第二部末尾の、源氏五十歳出家（死）の円満な終焉の目論見が作者によって放擲された物語状況の延長において理解すべきものであると思われる。

年立は、物語の年次を合理的に捉えるために整えられたもので、特に正篇についていえば、源氏の生の始発から終焉までを静態的に整理したものといえるが、それぞれの源氏の年齢記述に内包する矛盾等から他の見方の可能性を示してもいる。つまり、物語執筆の上のそれぞれの段階での作者の意識が源氏の年齢記述として現れたも

ので、物語が長編的な形態を整え更に自律性の中でその世界が促されるとき、それが年齢や年次記述相互の齟齬を生み出したわけであり、いわば年立は、作者の創作に関する内的秩序の動きをあとづけているものといえる。こうした考えにより新たな『源氏物語』研究の視界が開かれるのではないか。

(1) 平井仁子氏「物語研究における年立の意義について——源氏物語の場合——」(『中古文学』第二二号、昭五三・五九。引き続いての引用も同様である。

(2) 例えば「若菜」上巻の朱雀院の「廿がうちには、納言にもならずなりにきかし。ひとつあまりてや、宰相にて大將かけ給へりけむ。」(二一八ページ)という源氏についてのことは、源氏四十歳の時点で、中納言・宰相就任を二十一歳のこととして確認しようとする意識が認められ、源氏の生の時間の積み上げの上でのことばと考えられる。また大朝雄二氏は「若菜」下巻の四年の空白が冷泉院の在位年数からだけでなく、女三宮・源氏の年数からも確認されるもので、決して恣意的偶然による四年間ではないとされ、この空白は源氏の老いの深化を明らかにし紫上の危機的な状況を認めるためのものであることを指摘される(『源氏物語の方法についての試論』『国文学雑誌』昭四二・六所収)が、こうした時間記述は平井氏の述べられる「外的なものに左右されて」の「動かしがたい」「断定的な」年数

表記(1)の論文中的ことば)とばかりは考えられないものといえる。

(3)『源氏物語』本文の引用は山岸徳平氏校注『源氏物語』(日本文学大系)による。

(4) 武田宗俊氏「源氏物語の最初の形態」(『文学』昭二五・六〇七)。

(5) 当初この玉鬘を中心とする六条院をめぐる時間が一年のこととして構想されたと考ええることは、藤本勝義氏「玉鬘物語の構想と成立」(『東京学芸大学紀要』第二二集、昭和四六・二二)、「御幸三帖の構想・成立に関する試論」(『国語と国文学』昭四六・八)などに指摘がある。

(6) 拙稿「光源氏論——玉鬘十帖を中心として——」(『文学』第四三・四四合併号、昭五六・三三)。

(7) なお藤本氏は、(5)に掲げた二論文で、行幸三帖が「野分」巻までの物語・「梅枝」「藤裏葉」巻と質的相違があり、別列の構想圏であるところから、「野分」までの巻々が書かれたあと続いて「梅枝」「藤裏葉」両巻が書かれ、その後行幸三帖が挿入されたといわれるが、私見ではこの時間のあり方の違いは玉鬘の処遇に苦慮するところから発するもので、物語の進展に伴い深化する問題意識がおのずからこのような物語の構想を繰り広げたと考ええる。

(8) 風巻景次郎氏「源氏物語の成立に関する試論」(『文学』昭二五・一二二六・二)。

(9) 秋山虔氏「一九五一年上半期の日本文学の研究状況」(『日本文学史研究』十四、昭和二六・一〇)。

(10) 高橋和夫氏「玉鬘の並びの部分について」(『源氏物語の主題と構想』昭四〇・六、桜楓社)。なお、氏の所説の場合、「乙女」巻と「梅枝」巻の間に当初から四年間の時の流れを考えて若紫系に属する事件を想定されている点、当初は一年間であったものが三年に延長することになったとする私見と異なるところである。

(11) 武田宗俊氏「源氏物語の最初の形態再論」(『源氏物語の研究』昭二九・六、岩波書店)。

(12) 伊井春樹氏も「六条院の女衆——玉鬘十帖の成立に關連して——」(『国語と国文学』昭四六・八)において、「少女巻から梅枝巻の間にはその原始構想に沿った物語が存在していたが、第二部の具体化によつて光源氏の世界を一層はなやかにするためと、夕顔物語の結末をつけるために玉鬘を登場させ、改作してできあがつたのが現在の玉鬘十帖であろうと思う。」といわれる。

(13) 風景次郎氏(8)に掲げた論文。

(14) 旧年立は「玉鬘」巻冒頭の「この御殿うつりのかずのうちには、交らひなまし」(三二九ページ)という右近の思惟が、既に明石方が冬の邸に入っていることを踏まえた記述を前提にし「乙女」巻第三年の翌年が「玉鬘」巻としており、一方新年立の場合「胡蝶」巻の紫上の秋好への「花園の胡蝶をさへや下草に秋待つ虫はうとく見るらん」(四〇〇ページ)という歌が「乙女」巻第二年の秋好の「心から春待つ園はわが宿の紅葉を風のつてにだに見よ」(三二四ページ)という歌の返歌と考えられる点を踏まえてその翌

年のこととなり、「乙女」巻と「玉鬘」巻は同年のこととするというように、その根拠とする点の違いに兩年立の矛盾が起因するわけだが、これについて藤村氏は宣長の掲げる六つの根拠を挙げて「玉鬘」巻が「乙女」巻の翌年のこととする主張を補強されている。大朝氏はそれらを傍証にすぎないとされた上で、「玉鬘」巻、六条院への移りを含めた多忙の最中、右近の初瀬詣ではふさわしくないことから、自説を補強されている。(『源氏物語主題論争——鶯の嘴——』平元・六、笠間書院所収の「鶯の嘴」[1]及び「鶯の嘴」[2])。

(15) ここで、大朝雄二氏が源氏世界の人々の年齢関係が単純な十の倍数の重層的組み合わせになっていることを指摘されていることが想起されるところである(「人物の年齢をめぐる」、『源氏物語の正篇の研究』昭五〇・一〇、桜楓社所収、第六章)。

(16) 藤村潔氏「源氏物語の構想に関する一試論」(『源氏物語の構造第二』昭和四六・六、赤尾照文堂)。

(17) 更に、宇治十帖において十年単位の枠を考えることには大朝雄二氏などから批判のある(『源氏物語主題論争——鶯の嘴——』「鶯の嘴」[3])ところであり、当初から物語の確かな枠としてこうした年紀の存在を考えることには無理があると思われる。

(18) このような解釈の詳細については、拙稿「『源氏物語』『源氏物語』(『平安文学研究』第七八号、昭和六二・一二)を参照いただきたい。

(19) 同様に「若菜」下巻「はかなくて、年月も重なりて内(裏)の帝、御位につかせ給ひて、十八年にならせ給ひぬ」(三二六ページ)も「初音」以下九帖の膨らみにより変更された上での年数に従ったものといえる。

(20) 稲賀敬二氏「源氏物語成立論の輪郭」(『源氏物語講座』第三巻昭和二八・一一、創元社)。

(21) 室伏信助氏は「別の素材の構想の存在が有力になるが、しかし、それは消失した物語の先行を考えるのではなく、特にこの部分で、現実にはなかったかも知れぬ御息所の過去を強調する意図を重視すべきなのである。」と述べられ(『賢木』『国文学』昭四九・九、成立の経緯をふまえて)そこから自立した物語世界の読みを示される。

(22) この「桐壺」巻と「賢木」巻の六条御息所の年齢に関する矛盾に王権闘争に敗れた前坊の廃太子のイメージをみる考論もある(川崎昇氏「六条御息所の信仰的背景」(『国学院雑誌』昭四二・九)が、淵江文也氏が「第一皇子(朱雀)と第二皇子(源氏)との競合を経(たていと)に物語を展開させているとき、作者の脳裏に「前坊」健在といったような複雑な陰構図が潜在していたとは思えない。」(『源氏物語の人物年齢明示の不審について』、『国語国文』平元・五)と結論されており、また、この廃太子に関する明確な記述もなく、本論の方法的立場から創作上の意識の違いが記述の矛盾を惹起したとする考えに従いたい。

(23) 拙稿『源氏物語「葵」巻制作過程論』(『富山大学教育学部紀要』第三九号、平三・三)、『源氏物語「賢木」巻

の制作に関する試論」(『富山大学教育学部紀要』第三八号、平二・三)、『源氏物語「須磨」巻制作過程略解』(『文芸研究』第一二二集、平元・九)。参照いただければ幸いである。

(24) 拙稿「光源氏中将期の物語の制作過程解(中)——「花宴」巻の構想的位置づけをめぐって——」(『富山大学教育学部紀要』第四三号、平五・六)。

(25) (23)に掲げた拙稿『源氏物語「賢木」巻の制作に関する試論』。

(26) 池田勉氏「源氏物語「紅葉賀」巻における異質なものについて」(『国文学攷』第四二号、昭四二・三)。

(27) 鬼束隆昭氏は、帚木三帖に「桐壺」「若紫」「紅葉賀」以下の巻々に対する異説別伝物語意識をみられている(『異説・別伝・紀伝体——竹河巻をめぐって——』、『日本文学』昭五〇・一一)。

(28) 拙稿「蓬生」巻草子地試解」(『日本文学』昭五九・三)。

(29) 大朝雄二氏「成立論と三部構想論」(解釈と鑑賞別冊『源氏物語をどう読むか』昭六一・四、至文堂)。

(30) 更に、藤原温子十七歳(仁和四年、宇多帝女御)、藤原穩子十七歳(延喜三年、醍醐帝女御)、藤原安子二十歳(天慶九年、村上帝女御)、藤原娘子二十七歳(天延元年、円融帝女御)、藤原詮子十八歳(天元元年、円融帝女御)など比べても格段に若年であることがわかる。

(31) 大朝雄二氏(2)において掲げた論文。

(32) 秋山虔氏「若菜」巻の世界と方法」(『源氏物語』昭四

三・一、岩波書店所収 Ⅶ。

(33) 「鈴虫」巻源氏四十九歳の根拠としては、

① 柏木を追憶する気持が「鈴虫」巻にも強く、この「鈴虫」巻の「あはれ」が柏木一周忌と心理的に近いもので、同年とするのが妥当である。

② 女三宮持仏供養の場で、薫を「若君、らうがはしからむ。いだきかくしたてまつれ」「鈴虫」巻七九ページと語られることが、「横笛」巻で「わづかに、歩みなどし給ふ程なり」(五八ページ)とあることと時間的に近接するものである。

③ 女三宮の持仏供養は彼女の出家の翌年とするのがふさわしい。

などがあげられる。

(34) 大朝雄二氏が年立的契機としての歳月の累積を辿る手法が「柏木」巻を最後にして源氏の晩年に現れないことを指摘されること(「源氏物語の時間的秩序」、『源氏物語正篇の研究』第五章)、更に伊藤博氏による明石姫君の早すぎる出産年齢などの指摘(「光源氏の年紀」、中央大学文学部『紀要』文学科第五一号、昭五八・三)も、作者の年立への顧慮の希薄化の現れといえよう。

(35) 以上の事情の詳細については、拙稿「御法」巻の成立(『島大國文』第十三号、昭五九・一〇)を参照いただきたい。

(36) 拙稿「哀傷の春から弧愁の四季へ——『源氏物語』『幻』巻論——」(『平安文学研究』第七四輯、昭六〇・一二)。